

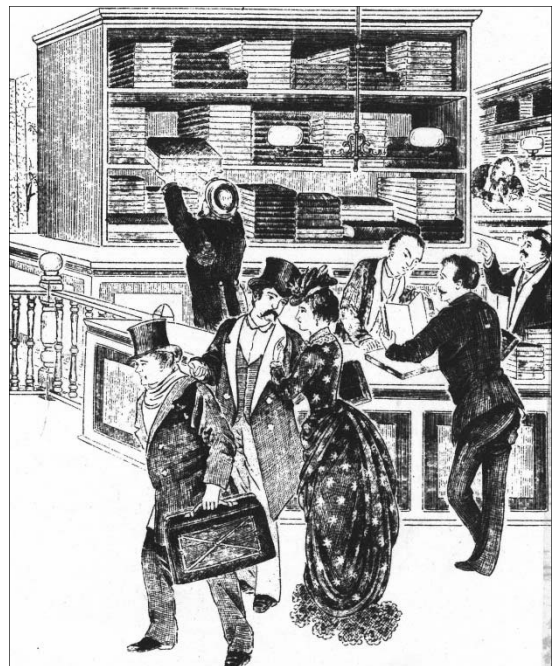
[表紙絵解題]

## 公家书房

内田慶市

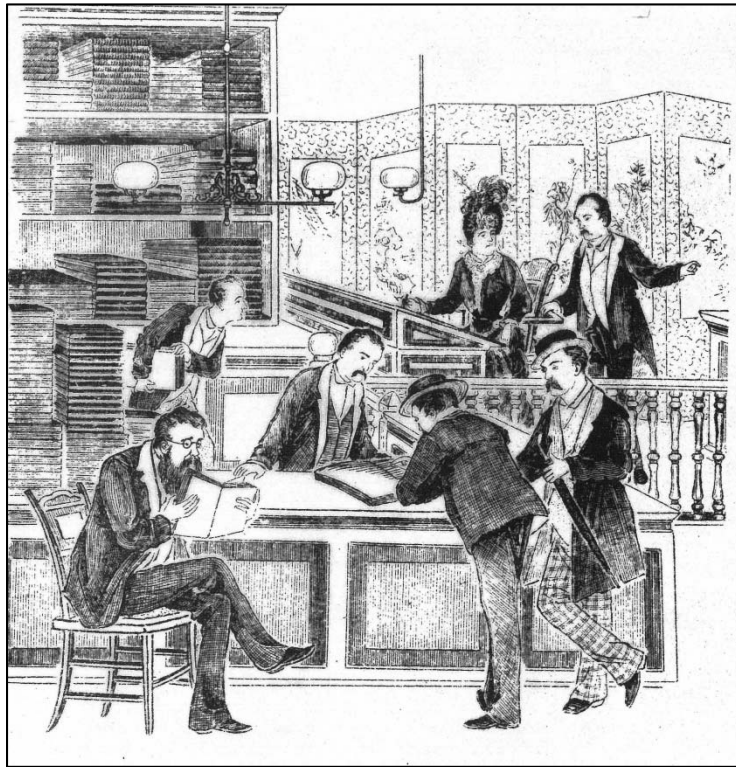
英国有所谓“公家书房”者，初时本无是名。自漫志得布厂主人某富极侪辈，尝蓄此志，欲购群书以备贫而好学者入内取阅，即他处书院缺少书籍者，亦购以赠之。当时已费银五十万两，而不及成功，齎志以歿。其妻席其余资，得银一千万两，因思夫生前所好，遂欲踵成其志。无如载籍极博，搜辑为难。忽闻英上院议员世爵某君因贫乏资，愿将自置有名之书房出售，急以银一百万两购之，并建大宅一所作为公家书房。无论何人俱可向管理之人取书诵读，惟不得携之出外，以防遗失。于是向学之士喜公家书房之成也，既美其夫，复称其妇，谓天下惟非常之人能成非常之事耳。按：中国各书院中，间亦有广备群书以供士子披览者，惟公家书房恐万不能有矣。诵杜少陵“安得广厦千万间，大庇天下寒士尽欢颜”之句，呜呼难矣！

イギリスにはいわゆる「パブリックライブラリー」というものがある。もちろん、最初はそのような名前にはなかった。マンチェスターのある紡績工場の主人は、仲間内で一番の金持ちであったが、多くの書物を購入し、それを貧しくても学問の好きな人たちが、その中に入って手にとって読めるようにしたいという志をいだき、他の書院で書籍が足りないという場合にも、書籍を購入して寄贈したいと考えていた。ただ、当時すでに銀 50 万両を費やしたが結局成功には至らず、志を残したままこの世を去ったのだった。その妻はその余財を譲り受け、銀一千万両を得たが、亡き夫の生前の



志を想い、そこでその意思を受け継ごうと決心した。しかしいかんせん、書籍は大量にあるし、その収集も困難であった。たまたま、イギリス上院議員の公爵が資金に困り、自分で建てた有名な書房を売りに出したので、急ぎ、銀百万両でこれを買い取り、さらに大きな建物を建てて

パブリックライブラリーとしたのであった。何人であっても、管理している人に言えば手にとって読むことが出来たが、ただ、紛失を避けるために、館外貸し出しは禁止となっていた。こうして、向学の士はみなこのパブリックライブラリーの誕生を喜び、その夫を褒めるだけでなく、またその妻をも称えて、非凡な人だけが非凡な事を成し遂げられるのだと言った。按ずるに、中国の各書院でも、たまには多くの本をそろえていて士大夫の閲覧に供するものもあるが、パブリックライブラリーのようなものは恐らくないはずだ。杜甫の「どうすれば千万間の大きな建物を得て、あまねく天下の貧寒の読書人を庇護し喜ぶ笑顔にさせることができるのか」の句を諷んじて、何と難しいことであるか。



これは『點石齋畫報』のイギリスのパブリックライブラリーについて述べた箇所である。この頃、すでにたとえば『中西聞見録』（1874年4月第21号）にはイギリス大英図書館の由来も紹介されており、いわゆるパブリックライブラリーというものを中国でも取り入れようとしていたことがうかがわれる。

ところで、何の因果かこの10月から勤務先の図書館の館長を仰せつかったが、私の図書館に対する基本的な考え方、つまり「書物の使命とは何か」ということについて「館長挨拶」に記したので、ここに転載しておく。

## デジタル化と図書館——併せて書物の使命について

関西大学図書館は、2014 年度に創設 100 周年を迎えることになっているが、その歴史および設備、規模から、大学図書館としてトップクラスの図書館である。蔵書数に関して言えば、総合図書館、高槻図書室、ミューズ大学図書館、堺キャンパス図書館を含めて約 220 万冊であるが、たとえば世界最大の大学図書館であるハーバード大学の 1530 万冊に比べたら、その数字が多いか少ないかは一概には言えないところではある。しかしながら、その蔵書数はともかくとして、本学図書館が世界に誇るべきものの一つに、個人文庫がある。総合図書館に収められている個人文庫としては、増田文庫、泊園文庫、内藤文庫、長澤文庫、中村文庫、吉田文庫等があるが、これらの文庫は、まさに「知る人ぞ知る」コレクションであり、それはオックスフォード大学ボードレイアン図書館のワイリーやバックハウス・コレクション、ケンブリッジ大学図書館のウェード・コレクション、ロンドン大学のモリソン・コレクション等にも匹敵するものである。現在これらの個人文庫等の貴重な資料のデジタル化とデジタル・アーカイブス構築の計画が東西学術研究所など学内の他の研究機関との協力の下に進められており、世界中の研究者からその正式公開・運用が待たれるところとなっている。また、これまで欧米の図書館では当たり前であった館内でのパソコン使用や LAN 環境、さらには KOALA を中心とした各種オンラインサービスも充実してきており、今後ますます研究者および学生の便に供する図書館となっていくはずである。

ただ、これは本学の図書館に限った話ではないのだが、ずっと私が感じてきたことを少しだけ述べておくこととする。それは一言で言えば「秘蔵は死蔵なり」ということ。つまり、書物の本来の使命は読まれることにあると私は考えているが、果たして多くの図書館でその使命が全うされているかという問題である。

私は、毎年夏に欧米の図書館での資料調査をすることがここ 10 年来のいわば「日課」となっており、今年もローマ国立図書館を始め、カサナテンセ図書館、ナポリ東洋大学図書館、ナポリ国立図書館、同国立文書館を訪れた。私は 16 世紀以降の近代における東西の言語文化接触・文化交渉学を専門としているが、研究の関係上、見るものはほとんどがいわゆる「Rare Book（貴重書）」の類いとなる。こうした本を閲覧する場合、日本だと何日前かに予約しておき、図書館長の許可を得て初めてそれが可能になるのだが、これまで欧米の図書館でこういう経験をしたことがない。紹介状もなく突然訪れても大抵はすぐに閲覧カードも発行してくれるし、貴重書も何とか見せてくれる。複写サービスも断られたためしは殆どない。書庫にまで入れてくれる場合もある。この他、多くの図書館ではそうした Rare Book をウェブ上で公開もしていて、ダ

ウンロードや印刷すら可能となっていることもある。オンラインでの複写依頼など当たり前である。

ところが日本や中国ではそうはならない。事前の予約はもちろんのこと、予約しても閲覧を断られる場合すらある。複写も全ページはダメで、半分までとか、奇妙な制限を設けているところも多い。つまり、欧米のあくまでも「公開」を原則とするのに対して、日本や中国では「秘蔵」に重きが置かれているのである。そして、面白いことに、この「公開」と「秘蔵」は、一方で「知的所有権」や「著作権」の保護の意識という観点からは、逆の相関が見られるということである。これが東西の根本的な違いだと私は考えている。「秘蔵は死蔵」であり、決して書物の本来の使命を果たすことにはならないということである。

もちろん、最近では国内でも「公開化」は、もはや止められない一つの流れとなっており、その典型として国立国会図書館近代デジタルライブラリーや早稲田大学図書館古典籍総合データベースなどが存在している。国外の Google Books や Open Library、Internet Archive などこうした動きを加速させる契機となっている。

ところで、デジタル化時代において、紙媒体はどうなっていくのかである。

教室から紙の辞書が消えて久しく、語学の授業など、ある単語を調べさせると、一斉に同じような電子辞書が開かれる。確かに、紙の辞書よりも軽しい携帯には便利である。近頃は、スマートフォンでも辞書アプリが入っている。iBooks 等の電子図書も普及しており、最近ではページめくりが紙と同じイメージで実現されてはいる。しかしながら、こうしたものには、根本的に欠けているものがあると私は思っている。それは、紙の質感とか紙の匂いである。たとえば、あの古書独特の匂いは決してデジタルでは再現されないものである。紙の暖かみ、手触り、そんな中から知的興味が沸き立ち、書き込みや赤線を引くことで思索が深まっていくのである。デジタルとアナログは、決して相対立し、排除し合うものではない。「あれかこれか」ではなくて「あれもこれも」であるべきで、まさに人と人との関係における「みんなちがって、みんないい」と同じであると私は考えている。